

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 「大モンゴル展」における参加型展示の試み： アンケート結果にみる評価

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00002176">https://doi.org/10.15021/00002176</a>

## 第3章

### 「大モンゴル展」における参加型展示の試み

#### —アンケート結果にみる評価—

小長谷 有紀

#### 1. はじめに

国立民族学博物館では1998年7月30日から11月24日まで、特別展示棟において特別展「大モンゴル展－草原の遊牧文明－」が開催された。この特別展示棟は、研究成果を展示に展開するうえでの「実験場」として位置づけられている[石毛1998]。本特別展の目的は、ユーラシア大陸のステップ地帯で展開されてきた遊牧生活について具体的な理解をうながし、その文明史的意義をしめすことにあった<sup>1)</sup>。この目的のもとで展示技法としては、いわゆる参加型展示に関する試みを「実験」した。

国立民族学博物館では、開館当初より、展示物に関して、さわることや写真を撮ることが許されており、今日「ハンズ・オン」と総称される参加型展示の先駆けとなる展示方法が試みられてきた<sup>2)</sup>。また、1996年11月にオープンした「ドクター民博」のコーナーも「ハンズ・オン」の一種ではある。ただし、企画全体を通じた本格的な参加型展示となると、この「大モンゴル展」が嚆矢である。具体的な試みの意図については、すでに別稿があるので参照いただきたい[小長谷1998a]。

一般に参加型という表現のもとで、多様な展示が可能である。本特別展での主眼は、研究者によって整理された学術情報を入館者が自らの意思で「能動」的に得ようとする行為をうながすこと、にあった。換言すれば、入館者が情報を策出するという「情報策出型」の展示を試みた。従来のように視覚を優先して学術的な情報を展示する場合でも、できるだけ入館者が自ら情報を引き出すべきだというスタンスを採っていた。こうした展示方針はまた、ふれる、さわること、使う、動かすといった視覚を越えた感覚に訴えること、すなわち「体感」を重視することでもあった。以上のような展示方針を採用することにもなった。こうした目標が達成されたか否かについて調査するために、特別展示期間中に計三回、いかのような項目に関するアンケート調査を実施した。

- 1.特別展を何で知りましたか？
- 2.この特別展にこられたのは何回目ですか？
- 3.この特別展をどのくらい時間をかけてごらんになりましたか？
- 4.この特別展で印象に残った展示は何ですか？
- 5.マルチメディア・ゲルでコンピュータにさわってみましたか？
- 6.試着コーナーでモンゴル衣装を着てみましたか？
- 7.モンゴルの一日を5分間に縮めて照明で演出しましたがどうでしたか？
- 8.会場の案内係やボランティアが解説をしましたがどうでしたか？
- 9.さわってOKマークのある展示品を手にとってみましたか？

開催直後にはアンケートを用意することができず、以下のような時期に実施した。

第一回目は9月11～13日 有効回答数359件

第二回目は10月9～11日 有効回答数366件

第三回目は11月13～15日 有効回答数280件

有効回答総数1005件

本稿では、展示技法に関する具体的な試みについて簡単に説明をしたうえで、それらについての入館者の反応について、アンケート結果からまとめて、展示の試みに対する評価の一助としておきたい。

## 2.「大モンゴル展」での試み

上述したアンケートにおける第4番目の項目は以下のような15項目から成っている。キョル・テギン碑、からくり壁画、生活絵巻、伝統的ゲル、未来のゲル、マルチメディア・ゲル、いとなみ（ウマなど）、いのり（マニ車など）、ひびき（馬頭琴など）、ひとびと（アルバムなど）、なりたち（風土と歴史）、あじわい（台所用品など）、よそおい（衣装）、「草原の風」ミニコンサート、その他

「その他」という項目を含むこれら15項目のすべてにおいて、展示の目的は一貫しているが、とくに展示技法におけるキーワードである「能動性」や「体感」という方針を体現しているのは、「からくり壁画」「伝統的ゲル」「マルチメディア」「ミニコンサート」であろう。また、アンケートの第6番目から第9番目までの問いにあるように、「試着コーナー」「照明」「ボランティア」「OKマーク」も、展示技法の方針と密接な関係をもっている。そこで、これらの試みについて簡単に解説してお

きたい。

1) 時空間を再現するための「光の演出」(写真1)

遊牧という生活様式は、基本的に、草原という生態学的環境を維持しながら成り立っている。そこにこそ、環境に対する負荷のより小さい持続可能な移動生活という現代的意義絵が見いだされる [Humphrey & Sneath 1999]。そこで、天と大地との間にある人の暮らしを演出する目的で、照明を工夫した。展示場全体を舞台として見立てて、朝焼け、雷、夕立、虹、夕焼け、星空というサイクルでの光の変化を展開させた。



写真1 光の演出

2) 情報策出型の「からくり壁面」(写真2)

今世紀初頭に描かれた有名な絵画は、民族誌的情報にあふれている<sup>3)</sup>。そこで、それらの絵画の模写をそのまま展示するとともに、それら拡大して壁面にかがげたうえで、その壁面に引き出しなどの形で解説、実物、写真などの情報を仕掛けておいた。こうしておくことで、入館者が情報を自ら策出することをうながしたのであった。

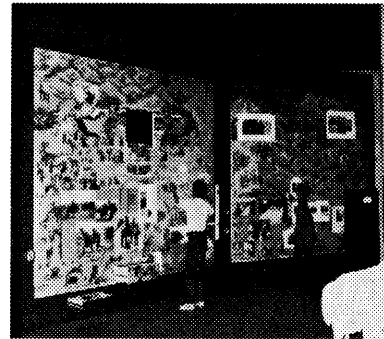


写真2 からくり壁面

3) 実物に入り込む「伝統的ゲル」(写真3)

モンゴル遊牧民の住居はゲルとよばれるテントである。ゲルそのものは、これまで日本で紹介されてきたことも多い。あるいはモンゴルを旅行すると、宿泊施設として利用されているのもゲルである。本特別展では、そうした一般的なゲルとは異なって、歴史映画のセットとして利用された経緯を持つ、20世紀初頭の実物を据えた。

本特別展では、同時代に生きる遊牧民であることを鮮明にするために、あえて未来も具現している。「21世紀のゲル」と称して、太陽発電と風力発電を組み合わせたエネルギーシステム等を装備した未来形のゲルを併設しておいた。

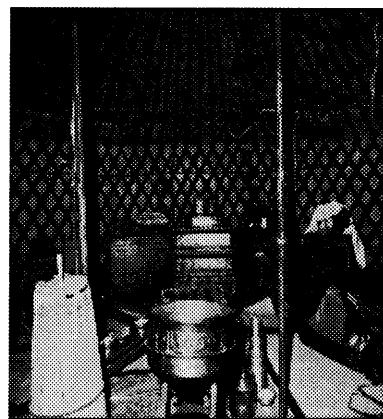


写真3 伝統的ゲル

どちらのゲルについても、入館者に対して内部に入ることを許した。展示物の中に入り込むことによって体感をうながしたのである。

#### 4) モノとフィールドをつなぐ「マルチメディア」(写真4)

ゲルというテント式住居は、遊牧生活に関するさまざまな物質文化の格納場所である。展示場においてもさまざまな展示物を配置した。しかし、体得的理解をめざしているため、その場では解説を避けている。代わって、コンピュータじょうでマルチメディアによって解説を用意した。マルチメディアであることは当然ながら、入館者に対して能動的であることを要請する。

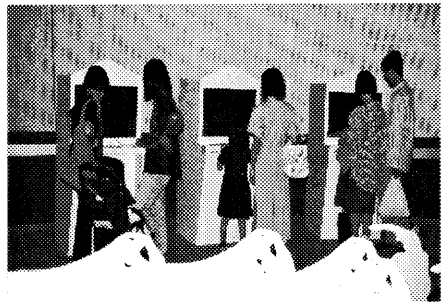


写真4 マルチメディアのコーナー

このマルチメディアの特徴は、まず第一に収蔵ないし展示されているモノの情報と、それが実際に使われている現場の風景とリンクさせていることである。また第二に、操作によってモノ及び風景を擬似的に立体視できる技術を採用している[小長谷1999]。こうしたコンピュータ技術の利用によって、実存の空間では不可能な展示次元を提供することになる。

#### 5) 癒しをあたえる「生の音」(写真5)

聴覚に訴える民族音楽を、原則として週末の土曜日と日曜日に、毎日三回程度提供した。生の音を聞くことは、疲れを意識して癒しを求めている現代の入館者にとって特に必要であると感じられている<sup>1)</sup>。モンゴルの民族音楽ではとくに、馬頭琴とホーミー（喉歌の一種）が良く知られており、一般の期待度は高いと判断された。

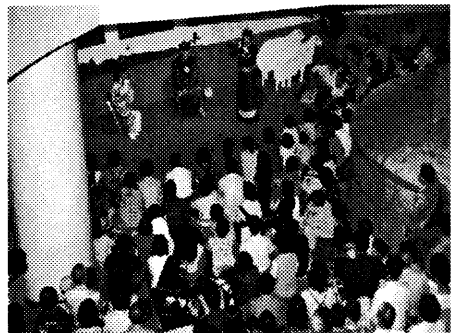


写真5 民族音楽の演奏

#### 6) 試着を含む「OKマーク」コーナー

生活技法を追体験ないし疑似体験することができるように、特別展示棟の二階全体を体験コーナーとした。ここには「さわってOK」「つかってOK」説いたサインを提示して、さまざまな道具を試すことができるようにした。たとえば、馬頭琴を弾く、玩具で遊ぶ、民族衣装を着るなどである。また、マニ車を回すことが読経

にに等しいことを提示するためのゾートロープ、モンゴル馬の高さを示すための階段、牛糞にみたてたおじゃみ等、あえて偽物で示すという技法も積極的に採用した。

いわゆる「ハンズ・オン」を徹底したといっただろう。

#### 7) ボランティア（写真6）

入館者の能動的な見学をいざなうために、案内人とボランティアを展示場にできるだけ配した。日本ではこれまで「ハンズ・オン」が普及していなかったため、人によるいざないが必要であると思われたからである。とくにボランティアを引き受けてくれた方々に対しては、入館者に対して解説者として存在するのではなく、誘導者として接していただくよう依頼した。



写真6 案内人とボランティア

### 3. アンケートの集計結果

アンケートは、会場の出口に備え付けておいて箱で回収するという、まったく拘束力のない自由形式で実施した。基本的にアンケートに応じるのは、展示に対して概して好意的な印象をもった入館者もしくは、特に不満を感じ、不服を申し述べたいという入館者であろうと推測される。その前提を了解したうえで、ここではとりあえず、アンケートの結果から把握できることを整理する。

#### 1) 特別展を何で知りましたか？

情報源については、「ポスター」と「新聞」と「口コミ」の3つがそれぞれ約25パーセントをしめる。

興味深いのは、世代によって3つの情報源のうちの順位が異なることである。10代、20代の若い世代では「口コミ」が34.2パーセントと優位をしめ、30代から50代までは「ポスター」の割合が28.1パーセントと高く、60代以上の高齢な世代では「新聞」が37.7パーセントと強い影響力をもつ。世代による情報源の違いが目される。

また、「口コミ」の率は初回アンケート時の24.2パーセントから徐々に最終回の29.3パーセントまで上昇している。入館者自身が、いわば歩くポスター、語るポス

ターとして広告効果をもちうることは明らかである。

2) 特別展に来られたのは何回目ですか？

ほとんどの入館者は初めてであり、およそ10パーセントあまりが二回目以上である。リピーターの割合について、年齢差はとくに認められない。ただし、女性は12.7パーセントであるのに対して男性は7.8パーセントであり、性差は明らかである。

また、3回のアンケートを通じた時系列変化も認められない。徐々にリピーターが増えても徐々に初回者も増えるので、相対的な比率はさほど変わらないものと思われる。

3) この特別展をどのくらい時間をかけてご覧になりましたか？

最多頻度を示すのは、「約1時間」である。年齢差、性差、時系列変化はみられない。3時間以上という回答も3パーセント以上あり、2時間以上の総計は23.8パーセントにも及ぶ。本展示における「滞留時間を伸ばす」という目的はほぼ達成されていると評価してよいだろう。

入館回数と滞留時間数のあいだには相関関係があるだろうと推測されるが、今回は相関関係についてまったく検討できなかった。今後の課題としておきたい。

4) この特別展で印象に残った展示は何ですか？

回答の多い1位から5位まで、以下の通りである。

「伝統的ゲル」(53.2パーセント)

「よそおい(試着コーナー)」(39.0パーセント)

「ミニコンサート」(38.0パーセント)

「ひびき(試奏コーナー)」(28.6パーセント)

「からくり壁面」(19.1パーセント)

複数回答のもとで、過半数を超えているのは「伝統的ゲル」である。実物という展示品の存在感を如実に示すとみてよいだろう。また、民族衣装や民族音楽というわかりやすい異文化理解の方法が好評を博していることも否めない。

本展示における「能動型(=情報策出型)展示の試み」の一つである「からくり壁面」については、決して評価されていないわけではない。しかし、「モノ」の実物の魅力や、衣服を身につけたり音を聞いたりする「ナマモノ」の魅力を越えることは難しいようである。

これらの数値については、若干の世代差が認められる。若い世代ほど音楽に引き

つけられ、高齢な世代では実物が重視される。

5) マルチメディア・ゲルでコンピュータにさわってみましたか？

入館者のおよそ半数が、コンピュータの前でマルチメディアを体験している。さわった人のうち、「面白かった」あるいは「まあまあ面白かった」と回答した人は88.8パーセントにのほり、満足度は概して高い。

体験しなかった人の率は後半になるにしたがって徐々に上昇する。個人的なコンピュータ操作によるマルチメディア展示については、一日の入館者数が増加するにしたがって、アクセス率の低下をまねくことは必須である。ただし、体験した人の満足度はつねに一定であった。

体験しなかったという約半数の人の、体験しなかった理由では「時間がなかった」という回答が多いので、インターネットによる提供も有意義であったろうと悔やまれる。今回の特別展では、独自のホームページをもち<sup>5)</sup>、展示場でのマルチメディアに関して若干の紹介をおこなったが、全面的に提供するには至らなかった。

先述したように、実際の展示場での魅力はむしろ実物そのものにある。インターネットなどを通じた「コンピュータ内部に仮想的に展開する展示」と「展示場での実物による展示」とは、互いに否定しあうモノではなく、情報の相互補完を実現するものとして期待される。

6) 試着コーナーでモンゴル衣装をきてみましたか？

試着した人は約半数であり、その84.3パーセントが「満足」している。試着しなかった人の理由は「時間がなかった」に尽きる。

注目されるのは、コンピュータに関する満足度が通時的に一定しているのに対して、試着に関する満足度は安定せず、3回目に76.9パーセントまで減少した。入館者から見れば、サービスの低下があったといえる。試着サービスは、対応できる人数の制限があるため、容量を越えた入館者に対して機会を均等に提供することはできない。このことを、アンケート結果もまた如実に示している。

7) モンゴルの日を5分間に縮めて照明で演出しましたが、いかがでしたか？

「よかった」ないし「まあまあよかった」を合わせて61.0パーセントにのほり、過半数の評価を得ている。しかし、「よくない」という積極的否定が13.1パーセントあり、またそもそも「気がつかなかった」という一種の否定が15.5パーセントもある。30パーセント近い否定があるということになるだろう[小長谷1998b]。



8) 今回の特別展では会場の案内係やボランティアが皆様に解説をしましたか  
が・・・？

会場での案内については、ほぼ90パーセントの肯定的評価を得ている。

しかし、当初に比べると最後には84.2パーセントまで下がっており、試着コーナーにおける満足度の低下と整合している。そもそも、秋の行楽シーズンのように混雑した時期になると、こうしたパーソナルな情報提供の方法には限界がある。「集積の逆効果」ともいうべき状況が発生する。ボランティアは本来、そうした「集積の逆効果」を補うはずであるが、ボランティアもまた、「集積の逆効果」を避けられないとみてよいだろう。

9) さわってOKマークのある展示品を手にとってみましたか？

試着コーナーやコンピュータに比べて参加率は90.3パーセントと高い。しかし、それだけに満足度は77.3パーセントと低くなる。

ここでは展示品が数多く提供されており、試着コーナーやコンピュータの葉に基本的に人数制限がないので、通時的変化はみられない。

10) この特別展の満足度は？

「大変満足」と「満足」をあわせて75パーセントにおよぶ。一方で「やや不満」と「不満」を合わせると9.6パーセントになる。アンケートに記入するという行為が、そもそも満足した人によるものであることが了解されるとともに、不満を感じた人もまたアンケートに訴えようとするのが改めて認識される。

大変満足という人が何によってそう感じているかという他の項目との相関関係については、上述のように今後の検討課題である。

#### 4. さいごに

本展示の技法上の特徴は、「能動型（＝情報策出型）展示の試み」にあった。そこで、この点にしぼって、アンケート結果を分析してまとめとしたい。

本展示に対して基本的に好意的な人びとが提出したアンケート結果によれば、展示総体としての満足度は75パーセントにおよぶ。そして、その数値よりも高い80パーセント台の満足度を、マルチメディアや試着コーナーといった「能動型展示の試み」であることが明示的な展示コーナーが獲得している。

ただし、この数値はもちろん、このコーナーで積極的に参加した人を母数として

算出されたものである。したがって、入館者の能動性をどれだけひきだせたかという指標による評価ができていないわけではない。展示場における心的および行動上の「態度の変化」をはかることのできるアンケートが今後、工夫できないものだろうか。

今回のアンケートでは、「能動型展示の試み」の一つであった「からくり壁面」に対する関心が、「伝統的ゲル」や「ミニコンサート」「試着・試奏」を越えられなかったことは注目される。「からくり壁面」は、展示場入り口付近にあり、本展示が全体として能動型であることを明示する機能も兼ねていたもので、それ自身が最も印象的なコーナーとして選択されなくてもかまわない。が、それにしても展示企画者サイドの期待を下回る評価ではあった。

「ミニコンサート」が、舞台鑑賞の一種であるとするれば、「伝統的ゲル」の中に入って見学し、衣装を「試着」し、楽器を「試奏」することは、いわば舞台へ入り込むことを意味する。「舞台へ入り込むこと」そのものが感覚的に喜ばれるのであろう。能動的といっても「情報を策出する」ところまで積極的にいざなうのは、いまのところ難しいといえよう。この点については、面白いことに、子どもによるアンケート回答と最も差を生ずる点であり、考慮に値する<sup>6)</sup>。

今後さらに参加型とりわけ「情報策出型展示」を試みるうえでは、以下のような課題が検討されなければならないだろう。

1. 情報を自ら策出しようとししない入館者の意欲を引き出すための工夫
2. 混雑時において、パーソナルな参加型展示がもつ限界の補完
3. 実物展示や実演についても、能動的展示に変換してゆくための工夫

## 注記

1) 展示場入り口で配布するリーフレットには「人類や地球の未来を考えてゆくうえで、人間のいとなみをほとんど大地にしるすことなく、もっぱら分散型の文明を構築してきた遊牧世界のあり方がひとつのおおきな想像力の源泉になることを願って、本特別展は企画されました」と記されている。

2) ハンズ・オンについては、これまでもっぱら子どものための展示技法という観点からとらえられてきた傾向があろう。[柴川1994]。

3) ハンガリーの文化人類学者ロナ・タスは、画家シャラブについてモンゴルに

における文化人類学者の草創期を担った重要人物として注目している。[Rona-Tas1972]。

4) インターネットを通じたアドバイザー・ボードには早くからコンサートの希望が寄せられていた。

5) <http://tenger.minpaku.ac.jp/>

6) 子どもに対するアンケートの結果については、本書所収の第3部第2章を参照のこと。

## 参考文献

Humphrey, C and D. Sneath

1999 The End of Nomadism ? Duke Univ. Press

石毛直道

1998 「遊牧世界へのいざない」小長谷有紀・楊海英編著『草原の遊牧文明－大モンゴル展によせて』千里文化財団 pp.9

小長谷有紀

1998a 「一九九八年特別展「大モンゴル展－草原の遊牧文明－」の生起」『民博通信』82、pp.70-79

小長谷有紀

1998b 「問わず語り「大モンゴル展」のその後」『季刊民族学』86、pp.111-116頁

小長谷有紀

1999 「地域研究における記述革新の試み－モンゴルをマルチメディアに描く－」熊谷圭知編著『第三世界の地域像の再構築と地誌記述の革新』平成9年～10年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書 pp.149-158

Rona-Tas, A.

1972 The Birth of Modern Anthropology in Mongolia, THE MONGOLIA SOCIETY, INC. BULLETIN 11-1, pp.5-12, MONGOLIA SOCIETY, INC.

小長谷 「大モンゴル展」における参加型展示の試み

染川香織

1994 『こどものための博物館』（岩波ブックレット362号）岩波書店